

福田拓也著『尾形亀之助の詩：大正的「解体」から 昭和的「無」へ』

岩下, 祥子
九州大学大学院比較社会文化学府：博士後期課程

<https://doi.org/10.15017/1456072>

出版情報：九大日文. 22, pp.49-52, 2013-10-01. 九州大学日本語文学会
バージョン：
権利関係：

◎書評

福田拓也著

『尾形亀之助の詩——大正的 「解体」から昭和的「無」』

——』

WASHITA
S.H.O.K.O.
岩下 祥子

著者は序論に高村光太郎「尾形亀之助を思ふ」（河北新報）一九五七年十二月）のほぼ全文を引用しながら数行を中略した。略されたのは以下の箇所である。

はしごの酒場へまでも連れてあるく痛々しいコゼットのやうな小さな娘さんが道でころんでも、自分で起き上がるまではすてて見てゐた。不当にチツプをねだる運ちゃんの前で黙つて紙幣を焼きすてた。彼は埋没するとやはり黙つて埋没してゐた。

伝え聞く尾形像は面白い。尾形の詩が読まれる際、まさにこの箇所には詰められているような人間の魅力が先に立つ傾向にあつた。『尾形亀之助全集』（思潮社、一九九九年十二月）を編纂し、尾形研究の第一人者でもある秋元潔は「生活史のほうからの読みときは、おのずと解釈の幅をせばめ、読むことの楽しさをうば

う。作者の生活史は限定されているが、作品世界は限定がなくゆたかである」（『尾形亀之助論』七月堂、一九九五年八月）と、個人史と作品とが重ねられることに繰り返し警鐘を鳴らした。タイトルは「尾形亀之助の詩」であるが、それに即して論じる姿勢が貫かれた本書は、尾形の詩を「読むことの楽しさ」の所以を追求し、「限定がなくゆたか」な一つの作品世界を提示し得た一冊と言つてよいだろう。

本書は、三冊の詩集、『色ガラスの街』（恵風館、一九二五年十一月）、『雨になる朝』（誠志堂、一九二九年五月）、『障子のある家』（私家版、一九三〇年九月）を中心に二部構成で尾形の詩が論じられている。

第一部『色ガラスの街』——大正的解体過程の共時的現われ——では秋原朔太郎『青猫』（新潮社、一九三三年一月）に同時代の抒情詩の軸を置き、尾形における「共時的現われ」について五章に渡り述べられている。『色ガラスの街』について著者は「一つの詩も、あたかも欠損した商品のように、いくつかのちぐはぐな寄せ集めという感」があることを始めに述べ、章を追つて「ちぐはぐ」の内実を明らかにしていく。

「部屋」は尾形の詩作を通じて頻出するが、著者はここで「部屋」を「日本家屋」として具象的に詩語をイメージしている。そのイメージを共有すると『色ガラスの街』の断層が見えてくる。例えば、「じつと／私をみつめた眼を見ました」と始まる「十一月の腫れた十一時頃」という詩である。第二連に入り「いつか路を曲がらうとしたとき／突きあたりさうになつた少女の／

ちよつとだけではあつたが／私の眼をのぞきこんだ眼です」と、眼の主である少女の輪郭が浮かび上がる。詩は「私は 今日も眼を求めてゐた／十一月の晴れわたつた十一時頃の／室に」と結ばれる。二連と三連の断絶を如何に読むか。著者は最後の三行を「メルヘンの詩による表象化を逃れ去ろうとする」「室」という詩の外部をもとりあえずは言語化している」とし、この三行は「メルヘ的な詩の無力を露呈している」と述べる。「無力」に含まれる意味を掘り下げたなら、

メルヘ的な詩が、「私」が「少女」を夢想する「書齋」や「室」というまさに自身の産出の場を表象する力を持っていない以上、それを言語化するために亀之助は、例えば「十一月の晴れた十一時頃」の最後の三行「私は 今日も眼を求めてゐた／十一月の晴れわたつた十一時頃の／室に」という日時と場所の記述の如き非詩的な言語に訴えることになる。

ということであり、この非詩的言語もまた「メルヘ的な詩的言語では言語化できない穴を埋めるために呼び出され」ることを思えば、意味は反転し、なくてはならぬ「詩的言語」であることが会得されるのである。

また、『色ガラスの街』における未来派の詩の検証からも「ちぐはぐ」が提示されている。「工場の煙突」が「唾」に見える詩を「音のしない昼の風景」と題する尾形を著者は「未来派的詩が労働力を次から次へと吸収し資本の増殖を極度に推し進める固定資本として捉えていた「停車場」、「機関車」、「工場」な

どの諸テーマを逆方向に捉え直し、労働力を吸収しない停止状態にある固定資本として書き換えた」と考察し、その上で、尾形の詩に反映されるマリネティックな未来派の要素として、相反する二つを並列させる「アナロジイ」を指摘する。「昼の／部屋の中は／ガラス窓のゼリーのやうにかたまつてゐる」（「屋の部屋」という詩は、「このやうに」を用いた比喩の力でそれを「ゼリー」という洋菓子、消費の欲望を生み出す西洋風で洒落た商品と化することに成功している」とし、詩的言語で現すことが出来なかつた「部屋」を馴染ませる「アナロジイ」を確認しながら、更に資本主義が促す「商品化」の作用も詩作意識の中に見ている。第一部で著者のいう「共時的現われ」とは、『色ガラスの街』における大正期末の共時性とそこから漏れた部分との両方を指すのであり、時空からの拘束と乖離の煩悶は一つの答えとならぬまま、「欠損」を思わせる「ちぐはぐ」、すなわち『色ガラスの街』の詩篇となつたのである。

第一部と第二部を繋げる、「大正末期のメルヘ的な詩・未来派的詩によつて抑圧された「日本的なるもの」は、昭和初期の亀之助の散文詩によつて初めて十全に言語化される」という一文は興味深い。著者自身が詩的言語として語る「メルヘ的な詩」や既成の枠に囚われない「未来派的詩」によつて、詩人として駆け出しであつた尾形の「日本的なるもの」が抑圧されているという著者の指摘は、広く『障子のある家』の詩を積極的に解釈する手がかりとなる。

第二部『雨になる朝』そして『障子のある家』——「部屋」

の言語化と「無」の露出」では、副題にもあるように『色ガラスの街』で均衡を保っていた「部屋」の言語化」が加速する有り様を四章に分けて論じている。本書の読解が、『障子のある家』に（辿り着く）と考えるならば、それは尾形亀之助の詩をどのように読むことであるのか。著者が端的に述べているのは以下の箇所であろう。

『障子のある家』という詩集は、メルヘンの・未来派的・「超現実主義的」詩によって一旦は抑圧・忘却された非詩的なもの・ごく日常的なものの回帰のメカニズムを「ありふれたこと」あるいは「きまりきつてゐる」こと自体を書くことではなく、それらに気付くこと、それらを再発見することを書くことが『障子のある家』での亀之助の詩となつて来る。

確かに、『障子のある家』は日常に溶けた、言うまでもないことが文章となり連なっている。著者も引いている詩「学識」は、「そして、雨は水なのだといふことに考へついた。／しかし、なつてゐるやうなものだといふことに考へついた。／しかし、あまりきまりきつたことなので、私はそれで十分な満足はしなかつた」と結ばれる。著者が言い切る、「きまりきつてゐる」ことに「気付くこと」、「再発見すること」を「書くこと」が尾形の詩であるとはどういうことだろう。尾形の詩を読む上で核となると言つてもいい、『障子のある家』の読み方を、著者はハイデガー『有と時』を用いて展開している。この第二部第三章「ハイデガー——指し向け構造とその壊乱」は本書で最も頁

を割いている章であり、真偽や賛否を置いて、雑記的にも見えない『障子のある家』の解し方を倦ね続ける尾形亀之助研究に提示された一つの作品解釈として、たしかに「限定がなくゆたかな試みである。

ハイデガーは「指し向け」について「道具は本質上……するのための或るもの」である。「する・ため」ということのみまざまな有り方とは、例えば、有用性とか寄与性とか使用可能性とか便利性というような有り方であるが、それらのさまざまな「する・ため」の有り方が、或る一つの道具立て全体の可能性を構成している。「する・ため」というこの構造の内には、或るものを（もう一つ別の）或るものへ指し向けるということが、存している」（『ハイデッガー全集第二巻』創文社、一九九七年十一月）と説明している。「配慮」はこの「指し向け」の中でも、最もそれを構成すると思われるものに「服従」する。つまり、「学識」で「雨は水」であると述べたり、「雨が降れば家が傘になつてゐる」というようなことは、「配慮」であると著者は確認する。しかし、同じく「学識」の中でも「裸なら着物はぬれない」という一文は、着物は濡れなくても身体は濡れているということが考えられるため、本来の被服としての機能が放棄され「配慮」はもちろん、「着物」という道具の「する・ため」すなわち「指し向け」が上手くつかめないのである。著者はこの微妙にスライドさせた構造を尾形の「戦術」と見ており、目的への指し向けの不発を何度も繰り返すことによつて、捏造されたフィクション的なものである絶えざる機能不全

状態、故障状態にそれを置き、指し向けの連鎖というものに絶えず揺さぶりをかけているかのようだ。

と、意識的な詩作を示唆した。それは、「指し向け」や「配慮」といった作業の前にハイデガーが大きな問として立てた「この世界とかあの世界ではなく、世界の世界性全般」との出会い方を、尾形が試行錯誤しているようにも見えるのである。

著者の詩に徹する姿勢への敬意を表すとともに、細かいことではあるが疑問点もある。例えば、第一部での未来派的「アナロジイ」の考察の箇所である。「これは——／カステーラのよ／明るい夜だ」と、詩「明るい夜」の一部を引いた後、

ここでは、「のように」を使つた比喻で、「明るい夜」を「カステーラ」という洋風で洒落た商品へと変貌させている。

大正十五年の「銅鑼」九号に発表された「幼年」という詩には、「お菓子」と「一日」を「のやうな」で結び付けた「お菓子のやうな一日」という表現が見られる。これらの詩には昼夜というごく基本的な身の回りの現実を未来派的「アナロジイ」によつて西洋風な商品へと変化させ、現実を未来派的詩的言語によつて表象可能なものへと変貌させることによつて詩を書くという亀之助の手法が見えてくる。

とあるが、「カステーラ」と「お菓子」は同等で語られるだろうか。以下は「幼年」全文である。

幼年

夜あけに床の中でハモニカを吹き出した

子よ

可哀いさうにそんなに夜がながかつたか

ブーブー ハモニカを吹くがよい

お前のお菓子のやうな一日がもうそこまで来てゐるのだ

確かに「カステーラのように明るい夜」は、その飛躍からも「商品化」と言つてよいだろう。しかし、眠ることに飽きた子がハモニカを吹く夜あけの様子には「一日」が始まる前から、「お菓子のやうな」甘さやときめきが滲んでいる。一篇の詩として読むとき、「幼年」における「お菓子のやうな一日」は就学前の子に繰り返される有り余る時間であり、お菓子はぐずる子を宥めるための慣れ親しんだものを想像する。すなわちここでは尾形の中の「日本的なるもの」の方が色濃く表れていると考えられ、「西洋風な商品」と読むことは難しいだろう。

しかし、三冊の詩集の尾形の詩を読み、詩から感じられる表現上の違和を追求していった先に、時代性と、そこに収まりきれずに付随した共時性が明らかになっていく本書は、読者を選ばず、読み応えと迫力を備えている。尾形亀之助の詩を、その詩に根差して論じている本書は、詩の解釈の広がりを考える上で、現代詩研究の重要な文献となるであろう。

(思潮社 二〇一三年七月三日 一九〇頁 二四〇〇円＋税)

(九州大学大学院比較社会文化学府博士後期課程三年)